

目 次

概要	1
序章 研究の目的と研究実施体制等	
1 研究の目的	5
2 研究実施体制	5
3 本報告書の構成と内容	6
第1部：研究編	
第1章 社会的スキルと求職面接スキル訓練研究	
第1節 社会的スキルの定義	11
第2節 職業リハビリテーションにおける社会的スキル訓練のあり方	13
第3節 訓練課題としての求職面接スキル	16
1. 訓練モデル及び訓練課題の選定	16
2. 訓練技法の選定	18
3. 訓練形態の選定	21
第2章 研究の経過について	
第1節 実験Iの目的	25
第2節 実験Iの方法	26
1. 対象者	26
2. 訓練の条件	26
3. 訓練に必要な器具及び場面設定	27
4. 手続き	28
5. 標的行動及び評価	30
第3節 実験Iの結果及び考察	31
1. 訓練場面における正反応項目数の変化	31
2. 般化場面における正反応項目数の変化	34
3. 評定項目（下位スキル）の分析	35
第4節 実験Iにおける結論と課題	36

第5節 実験Ⅱの目的	37
第6節 実験Ⅱの方法	37
1. 対象者	37
2. 訓練の条件	38
3. 訓練に用いた器具及び場面設定	38
4. 手続き	39
5. 標的行動及び評価	40
第7節 実験Ⅱの結果及び考察	41
1. ビデオフィードバックとモニタリング用紙の組合せ効果について	41
2. 面接訓練場面で習得された技能（下位スキル）の場面般化について	44
第8節 実験Ⅱにおける結論	45
第9節 今後の課題	45

第3章 訓練研究における今後の課題

第1節 評価の信頼性の問題	48
1. 応用行動分析における評価方法	48
2. 評価の信頼性	49
3. 信頼性に影響を与える変数	50
4. 信頼性を高めるには	51
第2節 社会的妥当性の問題	52
1. はじめに	52
2. 職業訓練プログラムと社会的妥当性	53
3. 今後の課題	56
第3節 般化の問題	59
1. 訓練場面と現実場面をつなぐ	59
2. 般化促進のための技法	61
3. 般化促進のための訓練環境、日常環境の整備	63
4. まとめ	64

第2部：マニュアル編

第1章 マニュアル編の構成と内容

第1節 構成と内容	69
-----------	----

第2節 訓練マニュアルの主旨と用語	69
第2章 ビデオモニタリングの手続きを用いた訓練方法	
第1節 訓練の進め方	72
1. クライアントに対する事前説明及びその他の準備	73
2. プリテスト	74
3. スクリーニングテスト	75
(1) 判断テスト	75
(2) モデリングテスト	76
4. 教育用ビデオの視聴	76
5. 面接訓練セッション	76
(1) 場面1「面接室に入り、席につくまで」	78
(2) 場面2「面接中の様子」	79
(3) 場面3「面接終了から退室まで」	80
(4) 全場面を通してのロールプレイ	81
(5) 訓練全体を通しての注意点	81
6. ポストテスト	82
第2節 スクリーニングテストの評価方法	83
1. 判断テストの評価	83
2. モデリングテストの評価	83
第3節 プリテスト・面接訓練セッション・ポストテスト時における面接ロールプレイの評価方法	85
1. 評価項目及び評価法	85
2. 各項目の評価基準	87
3. 訓練における達成目標	90
第4節 別場面での汎用について	90
第3章 訓練参加が困難なクライアントのためのオプションガイド	
第1節 自閉症	92
1. はじめに	92
2. 求職面接訓練と予測される問題	93
3. 訓練方法の改善	97
第2節 重度知的障害児	101
1. 基礎的技法	101
2. 先行条件の整備	101

3. 後続条件の整備	103
4. ターゲット行動の選定	103
5. 重度知的障害者についての面接技能形成のための技法	104

<巻末資料>

1. スクリーニングテスト（判断テスト編）回答用紙	108
2. スクリーニングテスト（モデリングテスト編）評価用紙	110
3. モニタリング用紙	111
4. 面接ロールプレイ評価用紙	116

※別添付属品として、教育用ビデオ「職業準備訓練生のための面接の受け方」

概 要

1 研究の目的

本研究は、主として知的障害者及び精神障害者に対して行う職業準備に関わりのある「社会的スキル訓練 (Social skills training、以下SSTという)」の一環として位置づけられる、求職面接スキル訓練を、より効果的に行う方法について検討することをねらいとして行ったものである。

職業リハビリテーションの分野において、適切な社会的スキルの習得は、就労及び雇用継続を成功させる条件として、作業能力の向上や労働生活習慣の形成等と並び重要なものである。求職面接スキルは社会的スキルの中で重要なものの一つであり、また、面接場面で要求される諸スキルには、「挨拶をする」、「お礼をいう」、「質問に答える」等、対人的コミュニケーションの基礎となる要素が多く含まれており、対人的側面に問題を抱える者が多い知的障害者や精神障害者にとって、このスキルの習得は、より高次の社会的スキルを身につけるための端緒となるように思われる。

本研究では、以下の事項を具体的な目的とした。

- (1) 職業リハビリテーションにおけるSSTのあり方に関して検討し、概念的整理を行う。
- (2) 求職面接スキル習得に有効な訓練技法について実証的検討を行うとともに、訓練で習得された下位スキル（「挨拶をする」等、面接場面に含まれる諸スキル）が、他場面で実行されるかといった場面般化の問題についても検討する。
- (3) 訓練研究全般の課題である「評価の信頼性」、「社会的妥当性」、「般化」の問題に関し、理論的整理及び検討を行う。
- (4) 上記(2)の実証的研究を基礎に、臨床・訓練の現場で実用可能な「求職面接スキル訓練マニュアル」を作成する。

2 研究の方法及び期間

本研究の方法は、文献による検討、実証的検討及び理論的分析であり、その一環として、外部の専門家を含む「職場適応研究会」を設けて、訓練のデザインについて検討した。

実証的検討のための求職面接訓練は、障害者職業総合センターの職業センターにおいて、職業準備訓練生2グループ(16人、11人)を対象に、この研究用に作成した教育用ビデオ等を使用し、本研究の主担当者及び協力者1人(時に2人)がリードして行った。

研究期間は、平成4年度から平成6年度までの3年間である。

3 結果の概要

(1) 職業リハビリテーション分野におけるSSTのあり方、概念整理

文献検討を通じた社会的スキルの諸定義を踏まえた上で、本研究では「応用行動分析」の理論に依拠した検討を行うこととし、本研究での社会的スキルの定義を「日常生活場面の中で、お互いの立場や権利を侵さずに円滑な人間関係を結び、かつ自らの目標を達成するのに必要とされる学習可能なスキル」ととらえることとした。

その上で、就労援助に関わる社会的スキルカリキュラムの代表例を参考としながら、職業リハビリテーション機関で実施すべきSSTについて検討し、求職面接訓練に関する実証的研究で採用する方法（訓練モデル、訓練課題、訓練技法、訓練形態等）を、ビデオフィードバック、モニタリング等を組み合わせて用いる小集団形式の訓練とすることにした。

(2) 実証的研究

実証的研究では、障害者職業総合センターの職業準備訓練生を対象に、まず第一に、前記(1)の方法による訓練を行い、その経過及び結果について検討した。すなわち、訓練を、1グループ3～4人で週1回、面接場面を3場面（入室から着席まで、面接中の様子、終了指示から退室まで）に分け、教育用ビデオ観察—各自の実演—実演ビデオのモニタリングの組み合わせで行った。結果の記録については、2名の観察者（研究者）が訓練生の実演ビデオを基に、各場面に含まれる合計34の下位スキルの習得度を評定した(実験Ⅰ)。

この結果、対象者のほぼ全員（16名中14名）が訓練3回目までに習得すべきレベルに達したこと、般化場面におけるスキルの維持に関し、ビデオフィードバックの効果が認められたこと、定型的な反応項目は般化しやすいが、非定型的で状況認知を要求する項目、質的習熟を要する項目は般化しにくいこと、障害別では知的障害者とそれ以外の者との明確な差は認められないこと、が判明した。

この結果を検討したところ、モニタリング用紙の効果的使用等に若干の問題があると考えられたため、訓練手続きを修正をしたうえで、別のグループの訓練生を対象とする訓練を行った(実験Ⅱ)。

その結果、スキル習得の初期段階において、また、理解力の低い知的障害者群において、ビデオフィードバックに加えてモニタリング用紙を併用すると、より訓練の効果を高めること、知的障害者群よりもその他の対象者群の方が、面接場面とは異なる状況においても習得した下位スキルを維持する傾向にあること、面接訓練を通じて習得された下位スキルは、状況の異なる般化場面においても利用可能である、といった結果が得られた。

以上の結果を分析したところ、面接訓練の技法としては、ロールプレイに加えビデオフィードバック及びモニタリングを導入すれば訓練効果を高めること、面接訓練を通じて習得された下位スキルは、状況の異なる般化場面でも利用可能であること、の示唆が得られた。

(3) 訓練研究全般の課題である「評価の信頼性」、「社会的妥当性」、「般化」の問題

職業準備のための社会的スキルの訓練プログラム作成に当たっては、「評価の信頼性」、「社会的妥当性」、「般化」の問題に関する考慮が重要であるが、応用行動分析の理論、先行研究等を参考に、制御変数、考慮事項等について整理、検討した。

(4) 臨床・訓練の現場で実用可能な「求職面接スキル訓練マニュアル」

実証的研究の結果を基に、ビデオモニタリングの手続きを用いた「求職面接スキル訓練マニュアル」を作成した。このマニュアルを作成するに当たっては、求職面接スキル訓練を行う場合に、必要な部分だけを読んでも実行可能なものとなるよう考慮し、訓練全般の進め方、具体的な教示や必要とされる注意点、本技法を用いた訓練への参加が困難な人への補助的指導法、用語解説、訓練で用いる諸用紙の様式が含まれている。なお、本技法で用いる教育用ビデオ「職業準備訓練生のための面接の受け方」も別に作成した。

序 章

研究の目的と研究実施体制等

1 研究の目的

本研究は、障害者の職業準備に関わる「社会的スキル訓練（Social skills training、以下SSTという）」の一環として実施される求職面接スキル訓練に関し、その効果的な方法について検討することをねらいとして実施したものである。ここでいう「障害者」とは、障害者職業センターにおける職業準備訓練の対象者となる知的障害者及び精神障害者のことを主に想定している。

職業リハビリテーションの分野において適切な社会的スキルの習得は、就労及び雇用継続を成功させる条件として、作業能力の向上や労働生活習慣の形成等と並び重要性を増している。職業準備に関連した社会的スキル群の中で、求職面接スキルは重要なスキルの一つであり、求職面接で自分の能力や意欲等を雇用者側にうまく伝えられることは、就労の成功に必要な事項である。

また、面接場面で要求される諸スキルには、「挨拶をする」、「お礼をいう」、「質問に答える」等、対人的コミュニケーションの基礎となる要素が多く含まれており、対人的側面に問題を抱える者が多い知的障害者や精神障害者にとって、このスキルの習得は、より高次の社会的スキルを身につけるための端緒となるように思われる。

以上の主旨に基づき、本研究の具体的目的は、以下のとおりである。

- (1) 職業リハビリテーションにおけるSSTのあり方に関し検討し、概念的整理を行う。
- (2) 求職面接スキル習得に有効な訓練技法について実証的検討を行うとともに、訓練で習得された下位スキル（「挨拶をする」等、面接場面に含まれる諸スキル）が、他場面で実行できるかといった場面般化の問題についても検討する。
- (3) 訓練研究全般の課題である「評価の信頼性」、「社会的妥当性」、「般化」の問題に関し、理論的整理及び検討を行う。
- (4) 上記(2)の実証的研究を基礎に、臨床・訓練の現場で実用可能な「求職面接スキル訓練マニュアル」を作成する。

2 研究実施体制

(1) 研究期間

本研究は、平成4年度から平成6年度までの3年度にわたって実施した。

(2) 研究実施体制

本研究は、障害者職業総合センター評価・相談研究部門の島田研究員が主となり同部門の向後

研究員と共同で実施したが、研究実施に当たっては、外部の研究者を含む以下の構成員による「職場適応研究会」での検討を踏まえながら行った。

職場適応研究会構成員

イ 総合センター研究員

島田 博祐 障害者職業総合センター研究員：主担当

(現：愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所社会福祉学部研究員)

池田 勗 障害者職業総合センター統括研究員

吉光 清 障害者職業総合センター主任研究員

向後 礼子 障害者職業総合センター研究員

ロ 外部の研究者

山本 淳一 明星大学人文学部講師

渡部 匡隆 愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所能力開発部研究員

3 報告書の構成と内容

本報告書は「研究編」と「マニュアル編」の2部構成になっており、それぞれに三つの章が含まれている。以下、各編各章の内容について概説する。

なお、本報告書では、障害名に関し、時代的趨勢等の事情から、法律用語の「精神薄弱」をあえて用いず、「知的障害」という呼称を基本とした。

(1) 「研究編」について

本編では本来的な意味での研究部分が扱われており、狭義の研究報告書としては本編が該当する。

第1章：社会的スキルと求職面接スキル訓練研究

本章では職業リハビリテーション分野におけるSSTのあり方に関して検討し、概念的整理を行った。第1節では、社会的スキルの定義に関して概観し、本報告書における定義を明示した。第2節では、就労援助に関わる社会的スキルカリキュラムの代表例を参考としながら、職業リハビリテーション機関で実施すべきSSTについて検討した。第3節では、第2節での検討事項を基にして、本書における実証的研究(研究編第2章)で採用する「訓練モデル」、「訓練課題」、「訓練技法」、「訓練形態」等について検討し、ビデオフィードバック、モニタリング等の組合せ技法を用いた小集団形式の求職面接スキル訓練を題材として選定する根拠を示した。

第2章 研究の経過

本章では、障害者職業総合センターの職業準備訓練生を対象に行った求職面接スキル訓練に関

する研究の経過を概観し、訓練技法及び下位スキルの般化に関し検討を行った。第1節から第4節までが実験Ⅰ、第5節から8節までが実験Ⅱ、第9節が今後の課題となっている。実験Ⅰでは「対象者のほぼ全員（16名中14名）が訓練3回目までに、習得すべきレベルまで達したこと」、「般化場面におけるスキルの維持に関し、ビデオフィードバックの効果が認められたこと」等が、また、実験Ⅱでは「ビデオフィードバックとモニタリングの併用が、スキル習得の初期段階において、また理解力の低い知的障害者に対して訓練効果を高めること」、「面接訓練を通じて習得された下位スキルは、状況の異なる場面に般化すること」等がそれぞれ主要な結論として得られた。

第3章 訓練研究における今後の課題

本章では、訓練研究全般に関わる今後の課題である三つの問題に関し、理論的な整理検討を試みた。第1節では、「評価の信頼性」の問題に関し、指標のとり方、影響する変数等について整理し、信頼性を高める方法についても論じた。第2節では、障害者の職業訓練プログラムの作成等と関連する「社会的妥当性」の問題に関し、先行研究を整理しながら検討を加えた。第3節では、スキルの「般化」の問題に関し、その制御変数を詳細に示すと共に、般化を促進するための技法に関して整理した。

(2) 「マニュアル編」について

本編は、研究編第2章で詳述した実証的研究及び「職場適応研究会」における検討を経て作成した「求職面接スキル訓練指導マニュアル」であり、臨床・訓練現場での実用に資する部分である。全編にわたり、具体的な教示を含めた平易な解説が加えてある。

第1章 マニュアル編の構成と内容

第1節がマニュアル編全体の構成内容、第2節が訓練マニュアルで使用する用語に関する解説となっている。第1節の内容は本項と一部重複するが、実用目的からマニュアル編のみを読む読者を想定し、あえて1節を設けた。

第2章 ビデオモニタリングの手続きを用いた訓練方法

本章は、訓練の進め方や評価方法等を順次具体的に解説したマニュアル編の根幹部分である。第1節では訓練全般にわたる進め方について、具体的な教示や必要とされる注意点等を含め、詳細に解説した。第2節では、ビデオモニタリング技法を用いた訓練に対するクライアントの適性を見るスクリーニングテストの評価法について解説した。第3節では、プリテスト・面接訓練セッション・ポストテストで行われる面接ロールプレイの評価方法及び訓練の達成目標等について解説した。第4節では、本訓練技法の面接以外の対人場面への汎用案について解説した。

第3章 訓練参加が困難なクライアントのためのオプションガイド

本章では、本編第2章で解説したスクリーニングテストの結果、本技法を用いた訓練への参加が困難であると判断されたクライアントへの補助的指導法に関し、タイプ別に解説した。第1節が、自閉症あるいは自閉的傾向の強いクライアントに対する指導法、第2節が重度知的障害者に対する指導法となっており、それぞれの特性を配慮した指導方法を提示した。